

匠 瑛 90 探訪

百観音

吉田を歩く

市内には、1889（明治22）年4月の合併で誕生した新町村が12あり、現在地区名となっっています。そのうち、飯高村と吉田村だけが江戸時代からの村名がそのまま使われています。

江戸時代の吉田村は八日市場村、高村に次いで規模の大

きな村でした。集落は中世からとみられる蒲野、江川、谷住方に加え、江戸時代初期に成立した城新田、同末期にできた新町、そして1926（大正15）年の軽便鉄道八日市場〜多古線開通で停車場が設けられ、1944（昭和19）年の廃線後に栄と呼ばれるようになったものを含め7つに分かれています。新田には、1635年ごろから60年ほど旗本稲垣氏の陣屋（居住地）が置かれました。1700年ごろから村内は7人の領主に支配されていたため神社や寺などの活動を通じて集落ごとのまとまりは強いものとなりました。

吉田地区を歩くと、紹介したいものがいくつかありますが、今回は「百観音」を取り上げることにします。

百観音とは、関東地方の「坂東三十三観音」

と関西地方の「西国三十三観音」、それに「秩父三十四観音」を合わせたものをいいます。

江戸時代、観音霊場めぐりが容易でなかったため、1か所にまとめてご利益を得ようとしたのでしょう。

吉田村妙覚寺の裏山に百観音がまつられたのは1856年のことで、同村の大半左エ門が大願主となり、世話人として吉田村3人と篠本村1人の名が見られます。石仏は高さ60センチほどで、一体ごとに寄進者の名が刻まれています。細かく見ると、吉田村はもとより市内では近隣の久方、木積、飯倉、貝塚などと少し離れた蕪里、東小笹、今泉、堀川などの村むら、さらに現在の横芝光町、多古町、芝山町、旭市、香取市に含まれる江戸時代の村まで広がっています。寄付者名には個人で建てたもの、講中、あるいは数名で寄進したものなどさまざまです。

3年かけてまつられた百観音の何体かが失われたのは惜しまれます。

（元 市職員・依知川雅一）

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080

吉田の百観音

